〔David Harvey〕第3章、「貨幣または商品流通」は長く、入り組んでいるが、ストーリは単純である。

貨幣は統一概念であるが、商品内部の使用価値と交換価値という二重性を反映した二重の機能を内包している。

一方では、貨幣は価値尺度として社会的必要労働時間の黄金の代表物として機能する。この役割においては、貨幣は可能な限り正確効率的な標準価値尺度を提供する固有の性質を有していなければならない。

他方で、貨幣は交換の拡大を円滑にする必要もあり、できるだけ軋轢なく困難の少ない形でそうしなければならない。この点では、貨幣は単なる媒介物として、ますます多様化する膨大な諸商品を動き回らせる流通手段として機能する。

二つの機能の間には、緊張や矛盾がある。

マルクスは、価値尺度としての貨幣（第一節）と流通手段ないし媒介物としての貨幣（第二節）とを対照させる。とはいえ結局のところ、存在するのはただ一つの貨幣である。（第三節）効率的な価値尺度としての貨幣と、効率的な流通手段としての貨幣とのあいだにある緊張関係を解決することは、部分的には他の流通形態の可能性－つまり信用貨幣の必然性によって与えられる。

その結果として債権者と債務者との関係は、資本流通というもう一つの流通形態の可能性をも切り開く。言い換えると、この章で登場するのは、資本という概念（およびその事実の）可能性である。

貨幣の可能性が交換過程から結晶化したのと同じように、資本の可能性が、価値尺度としての貨幣と流通手段としての貨幣との矛盾から結晶化する。

　第1節　価値の尺度

〔「マルクス主義経済学講座」新日本出版〕

第3章は貨幣の機能について大きく、❶価値尺度、❷流通手段、❸貨幣とりわけ、❹貨幣の意味を詳述している。

貨幣は商品から導出されたが、貨幣から資本を導出されなければ、資本主義の価値増殖に謎の解明にすすめない。これまで（交換過程）の分析はあくまでも商品の立場からであった。

貨幣は価値表現の発展の結果、必然的に形成されるもの。商品の交換過程上の矛盾を解決するために必然的に形成される、すなわち受身的な立場に立たされていた。ここでは、逆に貨幣の立場に立って、貨幣が一定の序列にしたがって展開する諸機能が研究の対象とされる。

〔的場昭弘〕－価値を測る道具としての貨幣－外見上は貨幣によって商品が共通の価値をもつように見えるが、実際は労働によって等価になっていることを忘れるな！

価値を測るということは、頭の中でそれがどのくらいであるかと、モノサシの役割をすればよいということである。実際の金などなくてもよい。観念的な貨幣であると言っている。

　（価値の尺度）

（p.167）諸商品は、貨幣によって同単位での計量が可能になるのではない。逆である。

…価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的価値尺度である労働時間の必然的現象形態である。

〔経済学ゼミナール－現代資本主義と『資本論』〕価値形態論では、商品は自分の価値を、一般的等価物として排除された特定の商品の自然素材によって明らかにされた。逆に、一般的等価物（＝貨幣）の立場から捉えなおすと、貨幣は、商品世界にその価値表現の材料を提供する、または、諸商品価値を同名の大きさ、すなわち質的に同じで量的に比較可能な大きさとして表すと言える。ただ、この機能によってのみ、金という特殊な等価物商品は、まず貨幣となる。

「逆である」：すべての商品は人間によってつくり出されたものであるから、その中に人間的労働の支出という価値が含まれている。この人間的労働の支出という同じ共通の性質があるから、貨幣ではかれるのだと言っている。

「必然的現象形態」：貨幣はいろいろな商品に含まれている価値が表に現れたものであるロバートオーエンは資本主義社会のゆがみの原因を「金もうけ」にあると考え、貨幣の廃止を主張し、労働証券、労働紙幣をつくった。3時間働らき、「3時間」お札を労働交換所でもらい、同じ3時間の物と交換してもらうのだが、1年くらいでつぶれた。

「労働証券は、ただ、共同労働に対する生産者の個人的分担と共同生産物のうち消費に向けられる部分に対する彼の個人的請求権を確認するだけである」Two Hours（2時間）とある。

（p.168）ある一つの商品の金による価値表現――x量の商品A＝Y量の貨幣商品――は、その商品の貨幣形態またはその商品の価格である。

金、つまり貨幣によって商品の価値がはかられていく。貨幣ではかった商品の価値を価格という。なじみが深いのは価値ではなく、むしろ価格である。なお、貨幣には値段はない。モノサシ自体では自分の値打ちをはかることができない。（記念硬貨）

(頭の中の貨幣)

　商品の価格または貨幣形態は、商品の価値形態一般と同じように、手でつかめるその実在的な物体形態から区別された、したがって単に観念的な、または表象されただけの形態である。

…数百万の商品価値を金で評価するためであっても、現実の金の一片も彼には必要でない。だから、価値尺度という機能においては、貨幣は、ただ表象されただけの、または観念的な貨幣として役立つのである。この事情は、きわめてばかげた諸理論を生み出した。

「観念的な、または表象されただけの…」：安いとか物の値段を考えるときに実際にお金をもっていなくともよい。

お金を持っていなくとも、高いとか安いとかを考える。

「舌で2回舐めると取引が成立する」：「舐める」という約束があれば、それはそれででよい。

（金と銀）

p.171　注　イギリスの貨幣制度の歴史は、金銀の比価の法律上の固定化と、金銀の現実の価格変動とのあいだの衝突から生じた一連の混乱に終始している。一つの商品だけが価値尺度としての地位を保つ、と」

P．172　注　法律上二つの商品に価値尺度機能が与えられている場合、には、事実上，つねに一つの商品だけが価値尺度の地位を占める。

　この度量単位そのものは、さらに可除部分（割り切ることのできる個数部分）に分割される。

「可除部分に分割」：貨幣で表わしいた商品の価値は価格である。お金の単位はだんだん細かくなる。

金本位制はイギリスで19世紀の初めころにでき、19世紀の終わりごろには世界中のほとんどが金本位制になった。中国は銀本位制だった。

仮に金1が銀15の固定から、金1対銀20になると、銀は値段が低く評価される。イギリスで銀貨を使うと損をするので、大陸の方に持ち出すことになる。過小評価された金属は流通から引き揚げあられ、鋳つぶされ、輸出されることになる。

（度量基準）

（p.173）貨幣は、価値の尺度として、また価格の度量基準として、二つのまったく異なる機能を果たす。

価値の尺度、価格の度量基準ということになると貨幣はまったくちがった機能を果たすようになる。

❶人間的労働の塊りとしての価値の尺度。→価値尺度機能。

❷度量単位としての価格の尺度。→価格をはかる。すなわち、機能。価値の塊りとしての金は、値打ちが下がることがあるが、価格の尺度の機能は変わらない書いている。

金の大量採掘→物価が上昇。＝金の価値が下がる。→商品にくべて金の価値が下がる、→だが、一律に価格が上がれば、価格をはかる単位としての混乱は起きない。

（価格変動）

p.174　なによりもまず明らかなことは、金の価値変動は、価格の度量単位としてのその機能を決してそこなわないということである。

価値の尺度　貨幣は人間労働を社会的に体現したものとして価値の尺度。

価格の尺度　貨幣は一定の金属の重さとしては価格の尺度。

〔的場〕金は厚くも薄くもできる。質的な差はない。だから尺度の機能は変わらない。価格は、価値とは照応していない。労働は価値の内在的尺度である。価値がなくても価格がつく場合がある。しかし、この分離は価値の尺度としての機能を損なわない。

（さて、価値形態の考察にもどろう）

P.176　金属重量の貨幣名は、さまざまな原因から、それらの最初の重量名からしだいに離れる。

金銀の含有量を変える。1ポンド銀貨の銀の含有量を半分に減らす。スタンプは同じ。王様は突然2倍の金持ちになる。

（貨幣の改鋳）

（p.177）こうした歴史的過程は、金属重量での貨幣名とその慣習的重量名との分離を世の習わしにする。

価値と価格が一致しないことが、価格形態そのもののうちにある。価格は上下するが、価値の周辺をうろうろしていて、平均的、長期的には価値と同じところに落ち着く。

（p.178）

　ある物の名称は、その本性にとってはまったく外的なものである。

名前をどう付けようと中身こそが大事である。

（p.180）価格は商品に対象化された労働の貨幣名である。

（価値と価格のずれ）

（p.181）したがって、価格と価値の大きさとの量的不一致の可能性、

お金で表した商品の価値であるということ。貨幣の価値が変わる、あるいは額面が価値を表わさない時には、価値と価格がずれる。価格はいろいろ変わる。例えば買いだめとか。価値と価格が一致しないことは価格形態の欠点ではなく、需要と供給で価格が決まるという商品生産社会の適切な形態である。

（p.182）

商品がその所有者のために、一般的等価物の役割を果たすためには、商品は金と取り替えられなければならない。

（了）